

「ザッショウの披露を致します」

総会など会議が終わって懇親会に入り、主催者あいさつや乾杯が終わると、司会者がメモを片手に、○○様よりビール1ケース、○×様より焼酎2本……などと紹介するのが、種子島では恒例になっています。

「ザッショウ」とは何だろうと辞書を引くと、「雑掌」「雑餉」と書き、古代、中世の時代に、種々の雑事を扱った役人のこと。さらには、もてなしのための酒や食物とされています。

古くからある言葉ですが、すでに江戸時代にもなじみが薄くなりかけていたらしく、種子島家の家老、羽生道潔（1768～1845）が、23代島主種子島久道の命を受けて編集した「種子島家年中行事」（熊毛文学会発行）の中でふれています。

道潔は「此島にて進物の事を雑掌といふ事」の私見として、聞きなれず、古い言葉を知らないことから、田舎言葉のように思い、「雑掌」という言葉をつかう人がまれになっていると指摘したうえで、「台所にて色々さまざま食物の調味あんばひ等の事を世話やく事也 是を以考れば人の進物八種々世話をやきて調ふ事也 雑の字クサグサとよみて 色々さまざま打交るをいふ 掌の字をツカサドルとよみて物事を取計ひ勤る事なり」と記しています。

「種子島の人」（柳田桃太郎著）によると、道潔の先祖羽生右京は、屋久島から種子島に渡り、安城村の畠主となった人物で、その九世孫である道潔が寛政5（1975）年に建てた住居が、現在の赤尾木城文化伝承館月窓亭です。道潔の孫、羽生道則（慎翁、1826～1901）は、祖父の歩んだ花道、茶道を極め、池坊大日本総会頭職を務めました。

夏休みの観光客や帰省者たちが集う中、島の日常に古い言葉が生き続けていることを楽しく思います。



羽生慎翁の紹介パネル＝月窓亭